

これからの**水稲管理**と 来年度栽培に向けての **土づくり**について



これからの水稲栽培管理について

7月の梅雨あけから暑い日が続き、稲の生育も早まってきています。
出穂時期1週間程度は穂を守るために深水の間断灌水を行ってください。
出穂以降は水を溜めすぎないように（根傷み防止のため）間断灌水を行うようにしてください。
また、早期落水は未熟米や胴割れ米発生の原因になりますので、落水は刈取7～10日前にするようにしてください。

防除について

	時期	薬剤名	対象病害虫	使用量	適正使用時期
基幹防除	出穂前	ビームバシボン粉剤DL	いもち病 紋枯れ病 ウンカ類 カメムシ類	反当 3～4kg	収穫14日前まで
	出穂前	コラトップトレボン粒剤	いもち病 ツマグロヨコバイ ウンカ類	反当 3～4kg	出穂5日前まで
	出穂前	アミスタートレボンSE	いもち病 紋枯れ病 ウンカ類 カメムシ類	1,000倍	収穫21日前まで
臨機防除	出穂後	スタークル豆つぶ	カメムシ類	反当250g	収穫7日前まで
	出穂後	ビームエイトスタークルゾル	いもち病 ウンカ類 ツマグロヨコバイ カメムシ類	1,000倍	収穫7日前まで

いもち病について

圃場によっては発生している所があります。
山沿い、川沿いなどの気温が低い所は注意して見てください。ひし型の斑点が出ていればいもち病です。

※矢印にあるような斑点（赤い枠にクリーム色や灰色のひし形の斑点）が特徴です。



収穫後の土づくりについて

毎年の米作りの中で土づくりをせずに放っておくと、土壌の有機物が減り、肥料成分も無くなっていきます。堆肥を散布したり稲わらをすきこんだりすることにより、微生物が活発となり、養分を保持する能力が高まります。

稲はケイ酸を多く必要とする作物で、栽培期間に必要とするケイ酸は反当約130kgとされています。不足すると茎葉が柔らかくなったり、未熟米が発生しやすくなります。稲わらのすきこみ等から吸収されるケイ酸は約70~100kgと言われ、不足分を補う必要があります。石灰窒素を稲の刈り取り後すぐに散布し稲わらをすきこむことで、腐熟を促進し、来年度の浮きわら発生を抑えたり、ケイ酸補給しやすくなります。

また、土力の達人等に代表されるケイ酸質資材を投入することで、不足分のケイ酸を補うことができます。来年の米作りに向けて今から取り組みましょう。

■ 石灰窒素 (反当20kg)

使用時期：稲刈後

稲ワラのすきこみ時にお使いください。散布することで、稲わらを腐らせ、有機物の腐熟を促進させます。稲刈り後早期にすきこむことで、次年度の栽培の作業効率も上がり、初期成育の向上にもつながります。



■ アヅミン (反当40kg)

使用時期：収穫後～春耕起時

腐植酸が主成分の肥料で土壌の保肥力、肥効、根づくりの向上に貢献します。地力維持のためにお使いください。ネオコンポ等の堆肥を十分に施用できない場合に代替資材として有効です。



■ 土力の達人 (反当60kg)

使用時期：秋の荒越し前または春の耕起時や基肥施用時

ケイ酸の吸収利用率が高く、従来のケイカルなどのケイ酸質資材と比べて施肥量を省力化できる肥料です。倒伏軽減はもちろん、未熟米発生を抑え、収量安定にも効果があります。秋に石灰窒素と一緒に施用することで稲わらの腐熟促進効果を一層高められます。また、乳白米対策としても効果があります。乳白米の発生原因の1つとして、デンプンの供給不足があげられます。日中だけでなく夜温が高くなると穂のデンプンの消費量が増え、登熟に必要なデンプン量が不足します。土力の達人の投入で、根に活力を与え、葉や茎を丈夫にすることで受光態勢がよくなるとデンプンの蓄積量が増え高温障害の軽減が期待できます。



■ 酵素でくさーる (反当45kg)

使用時期：収穫後～12月まで

刈穫後のわらの腐熟に最適な肥料です。多くの種類の微生物が生きたまま含まれています。短期間で有機物を分解できるので、稲わらの腐熟促進、堆肥の発酵促進に効果的です。ペレット状で撒きやすく、機械散布も可能です。



*** 石灰窒素と併用される場合は、石灰窒素投入後2か月程度期間をあけて投入してください。**



農産物品評会開催について

今年度は11月中旬に開催予定です。
たくさんの出品をよろしくお願いします。

